The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	甑島里方言のbasi
Author(s)	平塚, 雄亮
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2019, 16, p. 84-92
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大社会言語学研究ノート』第 16 号（2019 年 7 月）84-92

甑島里方言の *basi*

平塚　雄亮

【キーワード】甑島里方言、*basi*、形式名詞、助詞、文法化

【要旨】

本稿では、甑島里方言において用いられている *basi* の記述を行った。*basi* は九州方言で広くとりたて助詞のように用いられる形式であるが、里方言においては助詞としてのみならず、形式名詞的にも用いられることがある。形式名詞的に用いられるときは、種々の述語につき、*basin goto* あるいは *basi* で文を終え、「そうであるわけではない」という意味を表し、批判的な態度を表すのに用いられる。また、助詞的に用いられるときは、例示を表す。統語論的特徴として、格助詞に後接する、名詞に後接するが動詞のテ形や連用形には後接しないといった特徴を持つ。里方言の *basi* の語源は定かではないが、形式名詞であったものが助詞になる、つまり文法化が起こっているのではないかと考えられる。なお、本稿で記述を行った *basi* 以外にも、里方言には例示を表すとりたて助詞として *domo*（平塚 2015）や *doogu* などがあり、それらの形式との意味関係などについては今後の課題とする必要がある。また、本稿で対象とした里方言のみならず、九州各地に残存する *basi* の記述も行う必要がある。

1.　はじめに

甑島里方言では *basi* という助詞が、（1）のように主に例示の意味で使用されることがある（以下、用例は最上段から、形態素分析のない音素表記の例文、例文の形態素分析、グロス、標準語訳）。

（1）*tanpooni<u>basi</u>*　　*itacjaroo.*
tanpoo=ni=basi　　ita=to=jaroo
田んぼ=DAT=バシ　　行く:PST=NL=INFR
「田んぼにでも行ったんだろう。」

このような *basi* は九州各地で衰退しつつも、広く分布している（2 節で地理的分布について触れる）。ただし、里方言では *basi* が（2）のように形式名詞的に使用されることも多い（標準語に逐語訳ができないため意訳している）。

（2）*sendjaano*　*hutotacimo*　*siman*　*kotoba*　*siran*　*<u>basi</u>n*
sendjaa=no　huto=taci=mo　sima=n　koto=ba　sir-an　basi=n
川内=GEN　人=PL=も　島=GEN　こと=ACC　知る-NEG　バシ=GEN
goto.
goto
ようす
「川内の人たちも島のことを知らないわけじゃないのに。」

(2) のような形式名詞としての *basi* の使用は、里方言に特有なようである。本稿では、(1)、(2) のように用いられる里方言の *basi* についての記述を行う。本稿の記述は、2019 年 2 月に里で行ったフィールドワークで得られた結果に基づいている。話者は 1950 年代生まれの男性話者 1 名であり、16〜30 歳の間島外（薩摩川内市）での外住歴がある。なお、里方言の表記は記述文法書である森・平塚・黒木（編）(2015) に従い（ただし一部改変した）、アルファベットを用いた音素表記で示す。以下、2 節で九州方言および中央語の先行研究について触れ、3 節で甑島里方言の概要について記す。4 節では形式名詞としての、5 節では助詞としての *basi* の記述を行う。6 節は本稿のまとめと今後の課題である。

2.　先行研究

これまで 1 つの方言体系にしぼって *basi* の詳細な記述を行った研究はないようである。また、森・平塚・黒木（編）(2015) など、甑島方言の先行研究にも *basi* の記述は見当たらない。ただし、いくつかの辞典類に、九州各地での用例およびごく簡単な意味記述がみられる。たとえば藤原（1996）は、*basi* を助詞として記述し、宮崎県中部西奥（「タンボニバシイトッジャロ」(田んぼにでも行っているんだろう)）、熊本県阿蘇山南麓（「ワガ　シッテバシ　オルゴテ」(自分が知ってでもいるかのように)）、天草下島（「コーバシ　シェンバ」(こういうふうにでもせねば)）、長崎県壱岐島（「シケンバシ　ウケサッシャルトナ？」(試験でもお受けになるの？)）、佐賀県南部（「ヨシダサンバシネー？」(吉田さんででも、あったんじゃないか？)）、福岡県筑後南部（「タキモントリバシ　イキマシタロー」(焚き物取りにでも行きましたでしょう)）に分布がみられ、大分県と鹿児島県以外の九州に広く存在する形式であるとしている。意味的な記述には乏しいが、「ものごとをおさえつよめる気味の助詞」とある。また、『日本方言大辞典』でも *basi* が見出し語として立てられており、ここには鹿児島県肝属郡および喜界島でも使用があるとし、「疑問や仮定の文に用いられ、軽く一例としてあげる意や、婉曲に表現する意を表す」との意味記述がみられる（『日本国語大辞典』も全く同じ記述）。

以上は地理的分布に関する先行研究であるが、通時的研究に目を向けても *basi* の存在は指摘されている。矢毛（2002）によると、「例示強調」を表す *basi* は、鎌倉期から室町期、さらには近世前期の中央語においても盛んに用いられていたようである。現代語以外の *basi* に関連して、矢毛（2002）の研究を受け狂言での *basi* について研究した小林（2006）などもあるが、やはり「強意」や「例示」といったラベリングにとどまっており、前接語の特徴や生起しやすい文タイプなどのデータは示されているものの、これ以上踏み込んだ意味的な記述はみられない。

なお、*basi* の語源についての定説はないようであるが、堀内（1967）では、係助詞ワに副助詞シがついたとする説、助詞オバにシがついてバシに転じたとする説などがあることが述べられている。また、野村剛史氏の執筆による『日本語文法大辞典』のバシの項では、名詞「端」が助詞化した、つまり文法化の可能性が示唆されている。現在では九州方言にのみその姿がみられるようになっているが、以下、中央語の歴史研究も参考にしながら記述を行っていく。

3.　甑島里方言の概要

3.1.　甑島

甑島は、鹿児島県薩摩半島の西方海上約 40 キロメートルにある列島である。上甑島（里町里、上甑町中甑・中野・江石・小島・瀬上・桑野浦）、中甑島（上甑町平良）、下甑島（下甑町藺牟田（鹿島）・長浜・青瀬・瀬々野浦・片野浦・手打）、および多数の無人島からなる（面積は 119 平方キロメートル）。2004 年の川内市などとの合併により、行政区画上は薩摩川内市に属する。現在、甑島へは薩摩川内市の川内港より高速船が、いちき串木野市の串木野新港よりフェリーが運航されている。

薩摩川内市のウェブサイトによると、2019 年 4 月 1 日時点の人口は、上甑島 2,000 人、中甑島 204 人、下甑島 2,100 人、全島で 4,304 人である。このうち、本稿が記述の対象とする里町里には 1,093 人が住み、島内では最も人口が多い地域である。ただし島内に高校や大学はなく、進学を希望する場合は島外（多くは鹿児島県内）の学校へと出て行くことになる。

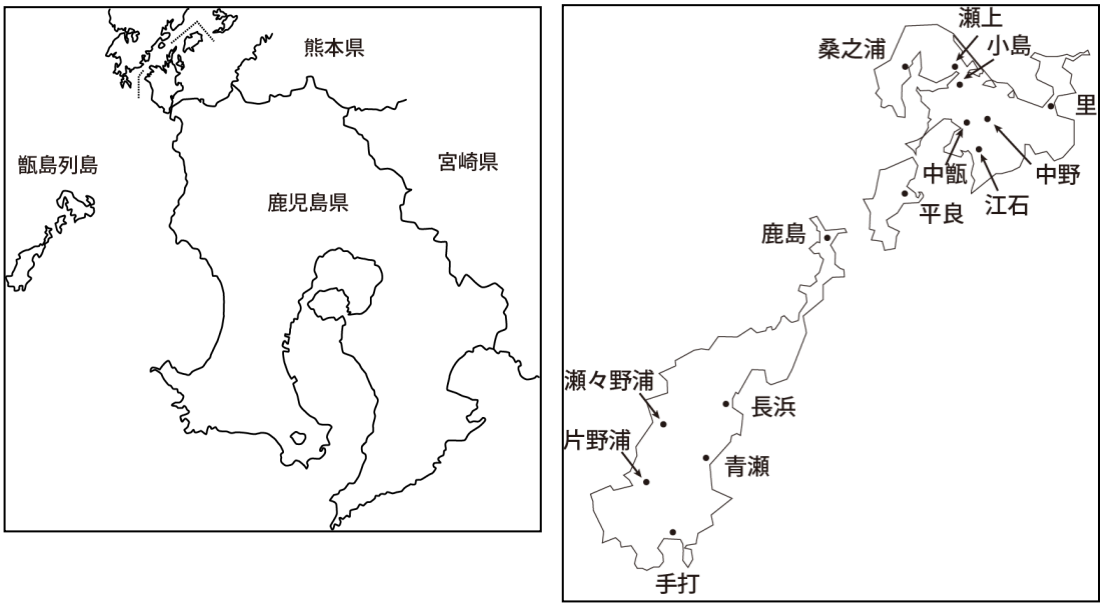

図 1　甑島の地図

3.2.　里方言

UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages（2003）では危機言語（方言）の 1 つとしては認定されていないものの、窪薗（2009）、木部（2011）などには、甑島方言が危機度の高い日本語方言であるとの言及がある。里町里の人口 1,093 人のうち、仮に方言を自在に操ることができるのが 65 歳以上であると考えると、その人口はわずか 568 人となる。また平塚（2019）によれば、甑島の中で里の標準語化の度合いは最も高い。よって、（話者）人口の少なさからも、そして伝統方言の衰退のしかたからも、危機に瀕した方言であると言える。なお、里方言の体系的な記述については、森・平塚・黒木（編）（2015）を参照されたい。

4.　形式名詞としての *basi*

4 節では、*basi* が形式名詞として使用されるときの用法についての記述を行う。5 節で述べるように、*basi* は助詞としても使用されるが、ここで先に形式名詞としての記述を行うのは、*basi* が形式名詞から助詞へと変化する文法化が起こったのではないかと考えるからである。つまりここでは、文法化が起こる前の *basi* の姿の記述を行うことになる。

里方言では *basi* は形式名詞として用いられるとは言え、その出現環境は 2 つに限られている。まず 1 つは述語に *basin goto* という形でつく、以下のような構文である。

（3）

anga	*sui*	*basin*	*goto*	*kuciba*	*dasuna.*
anga	sui	basi=n	goto	kuci=ba	das-una
自分が	する:NPST	バシ=GEN	ようす	口=ACC	出す-PROH

「自分がするわけでもないのに口を出すな。」

（4）

jai	*basin*	*goto.*
jai	basi=n	goto
COP:NPST	バシ=GEN	ようす

「そうじゃないのに。」

（5）

ikura	*kookjuuhindemo*	*kjuugataga*	*sogan*	*joka*	*basin*
ikura	kookjuuhin=demo	kjuugata=ga	sogan	jo-ka	basi=n
いくら	高級品=でも	旧型=NOM	そんな	いい-NPST	バシ=GEN

goto.	
goto	
ようす	

「いくら高級品でも旧型がそんないいわけじゃないのに。」

（6）

zjoozujai	*basin*	*goto.*
zjoozu=jai	basi=n	goto
上手=COP:NPST	バシ=GEN	ようす

「上手なわけじゃないのに。」

（3）は動詞述語、（4）はコピュラ動詞述語、（5）は形容詞述語、（6）は形容動詞述語[1)] であるが、いずれも *basin goto* という構文のなかで使用されており、このときの *n* は属格を表す格助詞である。話者の直感では（4）、（5）、（6）のように *basin goto* で文を終えるのが典型的な用法であるようであるが、（3）のように副詞的に用いることもできる。（3）～（6）の標準語訳には「～（わけ）じゃないのに」という訳を与えたが、逐語訳すると（3）は「自分がする（のでもある）かのように」、（4）は「そうであるかのように」、（5）は「そんない

1）　里方言では形容動詞が連体形をとるとき、被修飾語である後続名詞が「人」などの普通名詞のときは**zjoozu=jai huto*（上手な人）のようにコピュラ *jai* を連体形として使用することはできない。しかしながら、後続名詞が「こと」「わけ」のような形式名詞（準体助詞 *to* を含む）のときは *an huto=ga zjoozu=jai kotaa sittoi.*（「あの人が上手なことは知っている。」）や *zjoozu=jai wake=n naka.*（「上手なわけがない。」）のように *jai* を連体形として使用することができる。（6）ではこのような *jai* が現れていることから、*basi* が形式名詞であることを示していることになる。

いかのように」、(6) は「上手であるかのように」とでもなる。ただしこのような原義を離れ、たとえば (3) であれば、「自分がするかのように」という中立的な態度ではなく、「自分がするわけでもないのに」という批判的な態度として解釈される。

形式名詞として使用できるもう 1 つの環境は、述語に *basi* がついて言い切るときである。このときは *basi* の後ろには何もつかず、終助詞的であるとも言える。

(7) *nisiga* *hutoka<u>basi</u>.*
nisi=ga huto-ka=basi
自分=NOM 大きい-NPST=バシ
「自分が大きいわけでもないのに。」

(8) *daiga* *kiitoi<u>basi</u>.*
dai=ga kiitoi=basi
誰=NOM 聞く:CONT:NPST=バシ
「誰が聞いているわけでもないのに。」

(7)、(8) はそれぞれ、*hutoka basin goto*、*kiitoi basin goto* とも言うことができ、(4) ～ (6) の *n goto* が省略された形であるようにみえる。どちらの形でも同じ意味を表すようであり、*goto* が担っていた婉曲の意味を *basi* だけで担うようになったものであると考えられる。いずれの環境で用いられた場合も、前述したような「そういうわけではない」という意味を表し、批判的な態度を表明するときに用いられるという特徴がある。

5. 助詞としての *basi*

続いて、里方言以外にも広くみられる助詞としての *basi* の用法についての記述を行う。5.1 節で統語論的特徴について述べた後、5.2 節で意味論的特徴について述べる。また、5.3 節で形式名詞から助詞への文法化について考える。

5.1. 統語論的特徴

『日本語文法大辞典』のバシの項の説明によれば、中央語のバシは、ニバシのように格助詞に後接するが (「餓鬼道ニ<u>バシ</u>」など)、バシニのように前接することもあるという (「眷属<u>バシ</u>ニ」など)。里方言では、(1) で示したように、*=ni=basi* のように格助詞に後接することはできるが、*=basi=ni のように前接することはできない。

(9) *nisiga* *dokee<u>basi</u>* *ikkjai* *goto.*
nisi=ga dokee=basi ikkjai goto
自分=NOM どこ:DAT=バシ 行く:HON:NPST ようす
「あなたがどこ (か) にでも行かれるわけでもないのに。」

(10) *daiga<u>basi</u>* *teba* *aguicjuun?*
dai=ga=basi te=ba agu-i=to=juw-u=na
誰=NOM=バシ 手=ACC 挙げる-NPST=NL=言う-NPST=SFP
「誰が手を挙げるというのか (挙げるわけがない) ?」

よって、(9) を**doko=basi=i* (=*i* は与格を表す格助詞)、(10) を**dai=basi=ga* (=*ga* は主格

を表す格助詞）のようにすることはできない。（10）は *dai=basi* のように主格を表す格助詞 *=ga* を省略することは可能である。一方、（11）のようなときは、格助詞*=de* を省略することはできない。つまりこの文脈では**baaru=basi* と言うことはできないが、これは *basi* そのものの性質によるものというわけではないく、*=de* が具格を担う必要があるという文脈的な問題である。たとえば *baarubasi mottekee.*（「バールでも持ってこい。」）と言うことはできる。

（11）*baarudebasi*　*sengii*　*akanga.*
baaru=de=basi　sen=gii　ak-an=ga
バール=INST=バシ　する:NEG=COND　開く-NEG=SFP
「バールででもしないと開かないよ。」

=ga（主格）と同じく文法格を表す*=ba*（対格）の場合、**N*（名詞）*=ba=basi* のように言うことはできず、次の（12）のように無標にしなければならない。

（12）*aiga*　*nanbasi*　*suigii?*
ai=ga　nan=basi　sui=gii
あれ=NOM　何=バシ　する:NPST=COND
「あいつが何をするのか（何もしない）？」

basi が直接前接する要素は、（純粋な）名詞でなければならない。いわゆる動詞のテ形や連用形は*=wa* や*=mo* を後接させるため名詞的な性質を持つが、*basi* はこれらの形に接続することはできず、**sittebasi oigoto.*（*sitte* が「知る」のテ形）や、**waga ikibasi suigoto.*（*iki* が「行く」の連用形）などと言うことはできない。この点、2 節で述べたようなテ形に接続できる熊本県阿蘇山南麓方言や、連用形に接続できる福岡県筑後南部方言（藤原 1996）とは様相が異なっている。

5.2.　意味論的特徴

すでに 1 節でも述べたように、助詞として用いられる *basi* は例示を表す。標準語の「でも」に意味が近く、範列的関係を表すとりたて助詞としての性質を持つと言える。

（13）*sikenbasi*　*ukuiton?*
siken=basi　uku-i=to=na
試験=バシ　受ける-NPST=NL=SFP
「試験でも受けるの？」

（14）*zjukubasi*　*ikangii*　*gakkooni*　*ukaimonna.*
zjuku=basi　ik-an=gii　gakkoo=ni　uka-i=monna
塾=バシ　行く-NEG=COND　学校=DAT　受かる-NPST=SFP
「塾でも行かないと学校に受かるものか。」

矢毛（2002）などの先行研究をみると、近世前期の中央語においては、*basi* は疑問や禁止の意味を持つ文において現れることがほとんどであるという。里方言では、疑問文において *basi* が用いられることは（13）などで確認したが、禁止を表す文では用いることができないようである。よって、中央語では例があるような**mebasi hanasuna.*（「目を離すな」の意）などと言うことはできない。また、勧誘を表す文でも用いられないようであり、**meesibasi*

kuooka.（「ご飯でも食べようか」の意）や**nonkata<u>basi</u> suuka.*（「飲み会でもしようか」の意）などと言うこともできないようである。このとき、それぞれ *meesi<u>domo</u> kuooka.*や *nonkata<u>domo</u> suuka.*のように *domo*（平塚 2015）を用いるとのことであった。このほかにも里方言には例示を表す助詞として *doogu*（*kibinago<u>doogaa</u> honegoto koodai sioimoitabatte.*「キビナゴ<u>なんかは</u>骨ごと食べたりしていましたけど。」のように使用）などがあり、*basi* と他のとりたて助詞との意味関係などについては今後の課題である。

さて、4 節で *basi* が形式名詞としても用いられることを述べたが、以下のように言うと、同じ意味を表しながら、形式名詞としても（例文（15））、助詞としても（例文（16））用いることができる。

（15）*nisiga* *kotoba* *juu* *<u>basi</u>n* *goto.*
nisi=ga koto=ba juw-u basi=n goto
自分=GEN こと=ACC 言う-NPST バシ=GEN ようす
「あなたのことを言うわけでもないのに。」

（16）*nisiga* *koto<u>basi</u>* *juu* *goto.*
nisi=ga koto=basi juw-u goto
自分=GEN こと=バシ 言う-NPST ようす
「あなたのことを言うわけでもないのに。」

話者に意味の違いを確認したが、この 2 つの文に特に違いは感じられないという。里方言以外の九州方言では（15）の形式名詞としての用法はみられず、もっぱら（16）のように助詞としてしか用いられない。これは、里方言以外の九州方言では、文法化の完了後に形式名詞としては使われなくなったことを反映しているのではないかと推測される。

5.3. 形式名詞から助詞への文法化

最後に、5 節で記述を行った助詞としての *basi* と、4 節の形式名詞としての *basi* の関連性について簡単に述べたい。4 節で述べたように、現在はっきりと形式名詞としての使用が確認されるのは、*goto* と共起（後接）するという条件下においてのみである（例文（3）～（6））。このとき、「まるで～かのように」という意味で文を丸ごと例示するような機能がある。しかし例文（7）、（8）のように、*basin goto* の *n goto* を欠いて *basi* で文を終止させても同様の機能を持つようになった。さらに 5.1 節で示したように、今度は文をとりたてるのではなく、名詞（＋助詞）をとりたてるようにも変化し、里方言ではこれらすべての用法が存在している、と考えることができるのではなかろうか。本来例示につながる婉曲の機能は *goto* が担っていたはずであるが、それがなくなった後は *basi* が単独でそれを担い、とりたてるものが文から語へ、というプロセスで文法化したものであると考えられる。

なお、標準語においても歴史的に「丈＞ダケ」や「程＞ホド」のような変化があり、（形式）名詞が助詞になるという現象はよくみられる。これは 2 節で触れた『日本語文法大辞典』にある「端＞バシ」という変化の可能性を想起させる。

6.　まとめと今後の課題

以上、本稿では、里方言の *basi* について、形式名詞としての用法と助詞としての用法に分けて記述を行った。本稿の記述をまとめると以下のようになる。

(a) 形式名詞として使用されるときは、述語に *basin goto* がつく、あるいは *n goto* を省略した *basi* がつくことで、「そういうわけではない（のに）」という批判的な態度を表すのに用いられる。

(b) 助詞として使用されるときは、統語論的特徴として、格助詞=*ga* や=*ni* などに後接することや、名詞には後接するが動詞のテ形や連用形には後接しないことが挙げられる。意味的特徴としては、とりたて助詞のように例示を表す。

(c) *basi* の語源は定かではないが、(a) から (b) への変化、つまり、形式名詞から助詞への文法化が起こっているのではないかと考えられる。

今後の課題としては、まず里方言内の問題として、すでに 5.2 節で述べたように *basi* を *domo* や *doogu* などの例示を表す諸形式と比較する必要がある。また、里方言外の問題として、九州方言に残存する *basi* の記述を行い、さらには里方言の *basi* の位置づけについても考える必要があろう。

【参考文献】

木部暢子（2011）「鹿児島県甑島方言」木部暢子・三井はるみ・下地賀代子・盛思超・北原次郎太・山田真寛『文化庁委託事業　危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究事業　報告書』pp.69-76，大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所.

窪薗晴夫（2009）「次世代の音声研究」『言語』38-12，pp.38-43，大修館書店.

小林正行（2006）「狂言台本における助詞バシ」『日本語の研究』2-4，pp.1-16，日本語学会.

小学館国語辞典編集部（編）（1989）『日本方言大辞典　下巻』小学館.

日本国語大辞典第二版編集委員会（編）（2003）『日本国語大辞典』小学館.

平塚雄亮（2015）「甑島里方言の domo」『国立国語研究所時空間変異研究系合同研究発表会 JLVC2015 予稿集』pp.47-52，国立国語研究所.

————（2019）「甑島方言からみる言語変化と伝統方言形式のゆくえ」窪薗晴夫・木部暢子・高木千恵（編）『鹿児島県甑島方言からみる文法の諸相』pp.105-118，くろしお出版.

藤原与一（1996）『日本語方言辞書―昭和・平成の生活語―』東京堂出版.

堀内武雄（1967）「特殊な助詞の研究―ばし・がに・づつ・がな―」『国文学　解釈と教材の研究』12-1，pp.196-202，學燈社.

森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦（編）（2015）『甑島里方言記述文法書』国立国語研究所.

矢毛達之（2002）「近世前期における助詞バシの用法」『文獻探求』40，pp.45-51，文献探求の会.

山口明穂・秋本守英（編）（2001）『日本語文法大辞典』明治書院.

UNESCO Ad Hoc Expert Group on Endangered Languages (2003) *Language Vitality and Endangerment*, International Expert Meeting on UNESCO Programme Safeguarding of Endangered Languages.

【付記】

本研究は、JSPS 科研費 17K13468 の助成を受けたものである。

【グロス・略号一覧】

ACC: accusative, COND: conditional, CONT: continuous, COP: copula, DAT: dative, GEN: genitive, HON: honorific, INFR: inferential, INST: instrumental, NEG: negative, NL: nominalizer, NOM: nominative, NPST: non-past, PL: plural, PROH: prohibitive, PST: past, SFP: sentence-final particle

X:Y：当該形式は X を意味する形態素と Y を意味する形態素からなる。

-：接辞境界、=：接語境界

ひらつか　ゆうすけ（中京大学講師・大阪大学大学院修了生）